



佐藤淳子さん(前列左から2番目)
ゆりが丘出身。平成7年度に派遣団員としてカナダへ派遣される。その経験がきっかけとなり、中学卒業後、カナダ、ピクトリア市に留学後、アメリカ創価大学に進学。現在は中国で英語と日本語の教師をしている。一緒に写っているのは中国での教え子たち。

竹下内閣が提唱した「ふるさと創生事業」により、今から約十七年前、各自自治体一億円が交付されました。さて「これで何をしようか?」「イベントやまちのシンボルづくり、宝くじを買った自治体まで現れた中、名取市が選んだのは「人材育成事業」。学校におけるICT教育と、中学生海外派遣事業でした。

平成三年、中学生海外派遣事業の実施母体として名取市国際交流実行委員会が組織されます。この委員会の主催により、平成三年度から十六年度まで十三回の派遣が実施され、延べ二百五十人を超える生徒たちが「五感で感じる国際交流」を体験してきました。今年度についても二十一人の派遣団員が選出され、来年三月のオーストラリア派遣に向けて準備を進めています。

多感な中学生時代に国際交流を体験した生徒たち。彼らはどのような人生を歩んでいるのでしょうか。派遣団員OB・OGの中から、平成七年度の派遣団員で、現在中国で日本語と英語を教える佐藤淳子さん(第二中出身)の今を「紹介」します。

名取市国際交流事業のその後 中学時代の体験が私にくれたもの

私がまだ名取市立第二中学校二年生のある冬の日、あの青いジャージで学校から帰ると、名取市から一通の手紙が届いていました。覚えていたのは開封した瞬間に目に映った母の喜ぶ笑顔と、気づかぬうちに涙目になっていた自分です。今の自分があるのはその手紙をいただいたからと言って過言ではありません。

二年生の春休み、名取市が実施している国際交流の一環でカナダのピクトリア市に行かせていただきました。この交流がきっかけで、私は中学卒業後、このピクトリア市の高校に留学することになったのです。

初めは、体が私の一回りも二回りも大きいカナダの中学生とコミュニケーションがうまくとれず、カルチャーショックとストレスの連続でした。授業中も必ず一番前に座り、授業を録音し家に帰って何度も聞き返し勉強していたほどでした。

毎日が自分との戦いで、負けず嫌いの私は劣等感のあまり、学校のトイレに駆け込んで泣いてばかりいました。しかし、今振り返ったとき、この一番辛かった時期が最高の思い出であり、今の私の基盤となっています。

この時期に深く感じたこと、自分が心を開けば、相手も開いてくれる。地域の文化やしきたりを大事にし、順応できる自分になることの大切さ。勇気と積極性が道をひらく力。ユーモアと楽観的思考の大切さ。日本人としてではなく、同じ地球に住む同じ心をもった地球市民として人と接し、物事を考えることの大切さ。

これらは国際交流にかかわらず、人と接していく上

アメリカで考えた人生観

このカリフォルニア州では、8万戸の農家があり20年前から変わらないとの事。専業農家は半分の4万戸と半減しています。その原因としては都市圏の拡大による宅地化です。そのため分業化がより進み家族経営は減り、共同化された企業農業が増えているなど、農業を取り巻く状況は我が国と似ていました。明日からの農業について考える事は勿論大切なことですが、これからどうしたらいいのか、どうなりたいたいのかを考え、目先の事にとらわれず目標に近づけるよう努力したいです。そして何より一番感じたことは、誰もが自分の仕事に誇りを持ち、自信を持って生産しているところです。

アメリカと日本においてどちらが良いのかと問われたら、私は首をかしげています。ただ1つ言えることは、農業大国アメリカと言われる方々の気持ちのゆとりや農業を楽しむ自然体の心、色々な角度から物事を捉えることができる柔軟な姿勢、それが私にも養えたらと思います。そして次世代の子どもたちにも伝えられたら、新たな名取の農業が築かれるはず。魅力のある農業を目指すには、まず自らが魅力ある人間にならなくては、農業を学びに行ったはずが、これからの人生観まで考えさせられた気がします。

(団員 相原豊子さん)



どの視察先でも熱心にメモを取ります



広大な農地



ファームステイ先のホストファミリーと

これからの目標

今回の研修で学ぶべき課題が沢山ありました。1つは、アメリカの大規模農業に少しでも近づけるようにするには、今の状況ではどうして無理だとは思いますが、今回の研修で学んだことを生かしながら、一歩でも近づけるように努力したいです。

もう1つは安心して食べられる有機野菜に力を入れたいことです。我が家では低・減農薬のエコファーマーの認定野菜がいくつもあります。現代の子どもはアトピーなどの病気に悩んでいます。それを少しでも改善できるように、安心して食べられる野菜作り、有機野菜を目標に、これから頑張っていきたいと思っています。

(副団長 洞口ゆかりさん)

じょうほう 掲示板

今号もなとり国際交流ニュースレターをお読みいただきありがとうございました。このニュースレターは「名取市国際交流協力者」に登録している皆さんに毎号郵送しているほか、公民館などにも配布しています。国際交流協力者の登録は随時総務課で受け付けていますので、興味のある方はお気軽にご連絡ください。

また3月に来市するカナダ、ジャーニー・ミドルスクールの生徒たちのためのホストファミリー・ボランティアも募集します。詳しくは名取市総務課(電話 384-2111 内線 327)までお問い合わせいただくか、これから発行される広報なとり1月1日号に掲載予定の記事をご覧ください。

平成16年9月に来市したオーストラリア、マウントウエイバリー・セカンダリーカレッジのローウェン・メイ君から名取市の皆さんにあてたメッセージを、ホストファミリーの若山さんが届けてくださいましたのでご紹介します。マウントウエイバリー校からの情報によると来年1月、メルボルンでは英連邦に属する国と地域が4年に1度開くアマチュア競技大会「コモンウェルス・ゲーム」が開催されるそうで、今年は休みが長くなるそうです。

では皆さん、よいお年をお迎えください。2006年もどうぞよろしく願いいたします。

A Merry ,Merry Christmas to You and Yours!
Hello, how are you guys, I'm good, I've finished school for the year, I don't have to go back until February :)
We have long holidays in Australia. How is your school going?
I miss you of Natori and your city. I have remembered Natori so many times. How about you? and is it cold now?
When do you next have holidays?
How long do you have it?
I will send another message soon.
Wishing you all a New Year full of joy and fantasy!! See you, Rowen



農業青年たちが、カリフォルニアの大地に学んだ8日間

名取の農業を考える会～農村後継者海外派遣事業～

「名取の農業を考える会」(会長:相澤喜美氏)が、次世代を担う農業後継者の育成を目的とした「農村後継者海外派遣事業」を、名取岩沼農協と名取市の協力のもと、5年ぶりに実施しました。

熱い志を持つ名取の農業後継者たち。スケールの違うアメリカの大地で彼らはどのようなことを学んできたのでしょうか。派遣団の報告書から抜粋してご紹介します。

「農業への思いは世界共通」

広い国土を持ち、大規模農業に携わっているものの、日本であればJAの掲げる「安全・安心・安定」も考えており、大量生産方式だけではなく、有機農業に取り組む農家があるなど、次世代を担う子どもたちに安心できる食料を生産していたのが印象的でした。

視察を通して感じたことですが、農業に携わる全ての農業者は、規模の違いやほっかぶりとかウボーイハットの違いはあれ、また、機械化がいくら進んでも、その顔、手は、日焼けし、その笑顔は世界共通であり、農業者という共通点があり違和感なく接することができ、気兼ねなく意見交換ができ、一味ちがう視察ができました。

(団長 荒井範夫さん)



ファーマーズマーケットで、州認証の有機野菜を直売する店。右側に掛けられている書類は、証明書と農場の位置や広さ、土作りの方法、病気の防止方法など、農場主の顔写真とともに細かく掲載されたもの。

訪問した都市では4月から10月までほとんど雨が降らず、どこでも24時間かんがい用スプリンクラーなどが稼働しており、乾燥した気候により雑草なども枯れ、逆に有機野菜を作りやすい部分もあるようです。



派遣団の主な研修内容

7月11日(月)成田空港を出発 7月18日(月)帰国

アメリカ滞在中はファームステイ、農場・青果市場などの視察、カリフォルニア大学サンタクルーズ校で有機栽培などに関するレクチャーを受けるなど、充実した研修でした。

地産地消への取り組み

サンフランシスコで立ち寄った「フェリービルディングファーマーズマーケット」。オフィス街のビルの軒先で週3回開催され、並んでいる果物や野菜などはほとんどオーガニック(有機農産物)認証を受けており、各店の店先には試食用の野菜やフルーツがさらにディスプレイされていて実際に味も試すことができました。かつ栽培農家自身が直接販売。近郊の家族経営小規模農家がほとんどで、地産地消の理念のもとに非常に手間をかけ、いろいろな工夫を凝らしていました。

ある農場のトラックに大きく印字されていた「LOCAL FOOD FOR A SUSTAINABLE FUTURE」という一文が印象に残っています。楽しく、活気があり、たくさんの方が集まる「市」。本当に美味しいものであった時の新鮮な感動には、国境や地域性などを超えるものがあります。

有機農業によって経営を成り立たせている農場へも伺いました。消費者への直売やCSA(地域が支える農業)へも友好的に取り組み、かつ労働力としてWWOOF(有機農場で働きたいと思っている人たち)を効果的に活用していました。世界的に食の安全に対する関心が急速に高まっています。そのうねりのなかで、地域密着型で消費者を掘り起こし、直接販売で継続的な関係を築こうとしているこの農場の取り組みは非常に参考になるものでした。

(団員 三浦 隆弘さん)

で、この地球上のどこにいたとしても大事なものだと思っています。
カナダでの三ヶ月が過ぎ自分の態度や考え方ですべてが変わることを感じ始めたころから、言葉や自分にも自信が付き、今でも続いている最高の友情にも恵まれました。
その後、高校から学費免除、優等賞、地域貢献賞、スペイン語最優秀賞などもいただけるようになり、念願のアメリカ創価大学にも100%の奨学金をいただいていた一期生として入学することができました。
世界三十六ヶ国から集まった学生と共に最高の四年間を送り、社会行動学を学びながらますます視野を広げることができました。
子供が大好きな私は、大学在学中にメキシコの孤児院や、カリフォルニアの小学校などでボランティアをしていました。
三年生の中国北京大学留学の際にも、先生や学用品の足りない小学校で英語や地理を教える機会にも恵まれ、知り合いの市議会議員の皆さんや母の協力で名取の皆様の真心の文房具を贈呈することもできました。

このような経験を通して教育の道に進みたいと志すようになり、大学卒業後はマイアミの中学校で、数学と日本語とダンスを教えるインターンシップをしました。
六十%が黒人、三十%がヒスパニック系、九%が白人、一%がアジア人という学校で、「ジャッキー・チェンは先生のお父さんですか?」「なんで先生の目は細いのですか?」と生徒に質問されることがよくありました。
このような時、今度は私があらゆる可能性を秘めた彼らの可能性や視野を広げるお手伝いをする番なんだ、と感じました。
その後、日本の文化の恩人ともいべき中国への思い入れが深い私は、三国志の関羽に縁が深い中国の洛陽市に移り、現在勤めている公立の高校で一年間英語と日本語を教えながらまた中国語の勉強をすることにしました。
毎日がとても楽しくやりのある挑戦の連続で、素直で純粋な生徒たちから多くの事を学んでいます。
生徒たちの笑顔を見ると私まで元気をもらい、これから先もっと多くの子供たち



マイアミの中学校で教えていたころの佐藤さん。

ちに貢献ができるように大学院で学ぼうと決意することができました。
私は今、この全てのきっかけを作ってくれた名取市や、いつも私を信じてサポートをしてくれる両親にとっても感謝しています。
国と国がどのような状況下にあったとしても、名取市が行っているような若い人たちの交流さえ途絶えなければ、ゆっくりに着実に平和につながっていくと実感しています!ありがとうございます。



「旗揚げゲーム」で楽しく授業。

生徒たちの目も、キラキラと輝いています。